

## 地域情報（県別）

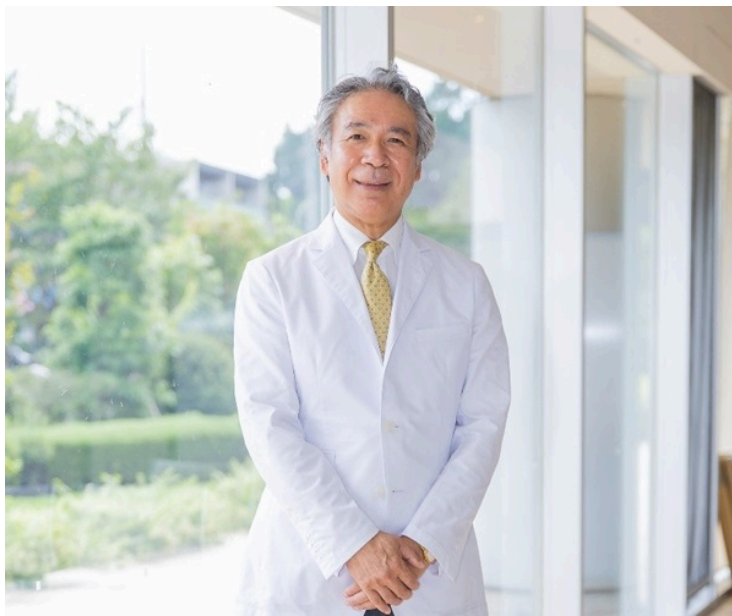
### 【東京】開院半年超で紹介・逆紹介率が増「地域連携が奏功」-市村正一・杏林大学医学部附属杉並病院病院長に聞く◆Vol.2

「杉並区トップの整形外科」を目指す

2025年2月21日（金）配信 m3.com地域版

杉並区初となる大学病院「杏林大学医学部附属杉並病院」は2024年4月の開院時から地域連携に力を入れた結果、紹介率が60%以上、逆紹介率が約80%まで増加した。市村正一病院長は高度医療を提供できる強みを生かし、「地域から紹介される病院」を将来像として描く一方、脊椎脊髄外科を得意とする自信の専門性を生かし、「杉並区トップの整形外科」も目指す。前身の病院から変わろうとする現在と展望について、市村氏に聞いた。（2024年12月9日オンラインインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら



市村正一氏（病院提供）

## 患者層の入れ替え図り、高度医療の注力目指す

——杏林大学医学部附属杉並病院は2024年4月の開院時から地域連携に注力しているといいます。その背景をお聞かせください。

一つに、国の方針を考慮して患者層の入れ替えを図りたいことが挙げられます。厚生労働省は医療機関の機能分化と役割分担の明確化を推進しており、軽症の患者さんは地域のクリニックが受け持ち、設備の整った大病院ではより重症の患者さんを診療する形に誘導しています。その面で、佼成病院だったころは慢性疾患の患者さんが多く、例えば眼科では目薬だけ、皮膚科では軟膏だけ処方し続けている、といったケースが目立っていました。

大学病院である本院としては、地域に開かれた病院でありつつも厚労省の方針を踏まえて高度医療の提供に力を注ぎたい思いがあるため、投薬のみの患者さんなど地域のクリニックでも対応できる場合には開業医の先生方をご紹介し、逆に高度な医療が必要な場合は先生方から当院をご紹介いただく、といった連携の形をつくろうとしています。

——そのような背景で地域連携に注力した結果、開院前より紹介率・逆紹介率が増えているそうですね。

開院前は再診の患者さんが多かったため、初診の紹介を受けづらいことがありましたが、現在は紹介率が60%以上、逆紹介率が約80%と状況が改善してきています。本院には高度な医療機器、例えば検査の面では高画質な画像を

撮影できる3テスラMRIを備えており、放射線診断医も4人います。これまでこのような高度な機器や人的リソースが十分に活用されていない課題がありましたが、地域連携の強化を図ることで以前はご紹介いただけなかった患者さんが増え、機器の活用度も上がってきています。

そのような経緯で当院は今、「紹介される病院」に変わろうと努力しているわけですが、最も重要なのは地域の口コミだと考えています。紹介された患者さんをしっかりと丁寧に診ること。そして、「あそこの先生は信頼できる」と開業医の先生方に思っていただくこと。理想の姿になるための近道はなく、患者さん一人一人に謙虚に向き合っていくことが大切だと考えています。そのためにもなるべく待ち時間を短くして、初診時に丁寧な診療ができる時間を確保できるよう取り組んでいるのです。現在、当院の1日の外来患者数は550人ほどで、佼成病院時代より100人ほど減っていますが、患者数の変化はこうした思いが反映されての結果だと思っています。

### 3病院の院長職を歴任「院長職はなかなか大変なもの」

——市村先生は脊椎脊髄外科が専門です。自身の専門性を生かした病院運営も意識しているのでしょうか。

そうですね。脊椎脊髄外科を中心に整形外科疾患の患者さんに支持されたい思いがあります。脊椎脊髄外科の専門医は整形外科領域の中でも少なく、当院の周辺で専門的に診療しているところはありません。既に近くの先生方には私の専門を知っていただいているので多くの患者さんをご紹介いただいておりますが、まだ地域の方の認知度は高くないため、一般向けの周知活動も行っていく予定です。直近では、2025年3月までに講演会を開こうと考えています。

——市村先生は2018年に杏林大学医学部付属病院の病院長に就任し、以降、佼成病院、杏林大学医学部付属杉並病院と院長職を歴任しています。

院長職はなかなか大変なもので、杏林大学医学部付属病院では整形外科の教授も務めていたため、特に人事には苦労しました。杏林大学の整形外科は関連病院を10以上持っているのですが、学内だけでなくそちらにも目配りをしなくてはなりません。他の大学病院より少ない医局の個々の医師と病院ごとの相性を勘案しながら人事を検討していくことは容易ではありませんでしたが、当時の経験が現在の病院運営にも生きているように思います。

病院長としては以前から、「全ての職員が勤めていることを誇らしく思える病院にしたい」と考えてきました。整形外科で言えば、体に痛みがあって車いすに乗っていた人が当院で治療を受けることによって痛みが取れて、歩いて帰れること。疾患を治して患者さんやご家族から感謝される喜びを職員一人一人が感じられるような医療をすること。それが、医療本来の姿ではないでしょうか。医療人として日々の仕事に満足感と自信を得られ、「この仕事を選んで良かった」「私はこの病院に勤めています」と胸を張って言えるような病院を目指しています。

一方、この地域には当院より評判の良い病院もあるため、すぐに全診療科でトップレベルに達するのは難しいと思います。ですから、先ほど伝えたように「まずは杉並区で一番の整形外科に」と志しているのです。

### 広く地域をカバーし、患者の負担減を図りたい

——最後に、今後の展望をお聞かせください。

今まで都心の医療機関に通っていた患者さんを当院で診ていきたいですね。当院は南北に見てJR中央線と甲州街道の間にあります。中央線沿いには大病院が複数ありますが、それらより南は甲州街道に至るまで当院しか総合病院がありません。なので、この広いエリアを当院がきちんとカバーして、地域の患者さんがわざわざ遠くまで行かなくて済むような環境をつくりたいと思っています。今後も小児診療をなんとか継続しつつ、他の診療科においても患者さんと地域のクリニックから選ばれる、名実ともに「信頼される病院」に成長していけば、それは自ずと達成されるのではないのでしょうか。

#### ◆市村 正一（いちむら・しょういち）氏

1980年慶應義塾大学医学部卒。2009年杏林大学医学部整形外科臨床教授、2011年杏林大学医学部整形外科学教室教授、2018年杏林大学医学部付属病院病院長、2024年4月から現職。専門は脊椎脊髄外科。日本整形外科学会専門医、日本脊

椎脊髄病学会脊椎脊髄外科指導医など。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

